イザヤ書48章 「わたしに聞け」

1A 頑ななイスラエル 1－11

1B 口だけの誇り 1－5

2B 知らない秘め事 6－8

3B 御名のための守り 9－11

2A イスラエルを見捨てない方 12－22

1B 主に愛された者 12－16

2B 耳を傾けたことによる平安 17－19

3B バビロンから出る喜び 20－22

本文

イザヤ書 48 章を開いてください。私たちは、イザヤ書の後半で、一区切りがつくところに来ています。40 章を始める時に、後半部分の大まかな流れをご紹介しましたが、後半は、エルサレムに対する慰めが中心になっていることを紹介しました。バビロンにすでに捕え移されている民が、エルサレムに帰還する約束が、その慰めの背景になっています。

そして後半部分が主に、三つに分かれる話をしました。それは、それぞれの最後に、「悪しき者には平安がない。」という言葉でしめくくられるところから分かります。40 章から 48 章まで、49 章から 57 章まで、そして 58 章から 66 章までです。48 章は、初めの区切りの最後の章になります。

40 章から 48 章において、その背景にあるのは、異邦人であるキュロスが、ユダヤ人を解放して、エルサレムに帰還、神殿を再建させるのに用いられる器になるということです。これを、主があらかじめ計画されていて、前もって知らせることによって、他の神々とは次元の異なり、この方だけが神であり、他にはいないことを証ししておられます。

その最後の部分が 48 章です。ここは、呼びかけになっています。12 節に、「わたしに聞け」という言葉がありますね。これまで主が語られたことに、未だ聞き入れようとしないという心の頑なさがあることを、主は警告しておられるのです。ここは、福音書において、主イエスが、約束のメシアであるのにも関わらず、それを聞いても心が鈍くなっていることに関わるものです。

1A 頑ななイスラエル 1－11

1B 口だけの誇り 1－5

1 これを聞け、ヤコブの家よ。あなたはイスラエルの名で呼ばれ、ユダの源から出て、主の御名によって誓い、イスラエルの神を呼び求めるが、真実をもってせず、また正義をもってしない。2 実に

彼らは聖なる都の出だと自称し、その名が万軍の主であるイスラエルの神に寄りかかっている。

47 章の終わりにかけて、主は、バビロンを滅ぼされることを語られました。それに対して、「これを聞け」と命じておられます。ところが、聞いていないのです。だから、その誇りには、「真実」や「正義」がともなっていないということです。口では神を敬っているが、心が離れているのです。

初めに、「ヤコブの家よ」と呼びかけておられます。ヤコブが、神の御使いと格闘して、太ももの関節を外されて、それで泣いて、祝福してくださらなければ、あなた様を離しませんと、しがみつきながら懇願しました。それで主の使いは、彼にイスラエルという名を与えました。これは、神に勝利したという意味にもなるし、神に支配されているという意味にもなります。そして、「ユダの源から出て」とありますが、ヤコブが、ユダに対する預言をしました。それは彼から王権が離れず、「彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う」と言いました（創世 49:10）。これは、王なるメシアが来られる預言です。ですから、王たちがユダから現れ、メシアもそこからやって来るということです。そして、エルサレムは聖なる神の住まわれる都であり、万軍の主に寄りかかっている者と誇っています。

ところが、今、主が彼らをバビロンから連れ出して、エルサレムに帰還させると約束されているのに、それに聞いていないのです。誇るべき名は持っているけれども、それにふさわしい歩みをしていないということです。パウロが、自分の時代のユダヤ人に対しても、同じことを言っていました。ロマ 2 章 17 節から 24 節です。

> 17 あなたが自らユダヤ人と称し、律法を頼みとし、神を誇り、18 みこころを知り、律法から教えられて、大切なことをわきまえているなら、19 20 また、律法のうちに具体的に示された知識と真理を持っているので、目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だ、と自負しているなら、21 どうして、他人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなと説きながら、自分は盗むのですか。22 姦淫するなと言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取るのですか。23 律法を誇りとするあなたは、律法に違反することで、神を侮っているのです。24「あなたがたのゆえに、神の御名は異邦人の間で汚されている」と書いてあるとおりです。

ユダヤ人という名を誇っていても、ふさわしいことをしていなければ、神の御名が異邦人の間で汚されているということです。これは、キリスト者でも同じですね。アンティオキアにおいて、人々がキリストの弟子たちを「キリスト者」と呼ぶようになりました（使徒 11:26）。これは、小さなキリストというような意味で、侮蔑の呼び名でした。けれども、イエスにならって生きていこうとする姿は、見て取っていたのです。私たちが、キリスト者であることを誇りにして、歩みが異なるものであったら、真実をもって、正義をもって自らをキリスト者と呼んでいないということになります。

3「かつて起こったことは、前からわたしが告げていた。それらはわたしの口から出て、わたしはそれらを聞かせた。にわかに、わたしは行い、それは成就した。

は、キュロスが来ることを、150 年ぐらい前にイザヤを通して語られ、しかも、その成就は、瞬く間に行なわれます。バビロンが栄えていた時に王が突如として殺され、バビロンが崩壊するのです。

4 あなたが頑なであり、首筋は鉄の腱、額は青銅だと知っているので、5 わたしは、かねてからあなたに告げ、まだ起こらないうちに聞かせたのだ。『私の偶像がこれをした』とか 『私の彫像や鋳た像がこれを命じた』とか あなたが言わないようにするためだ。

主は、彼らがなかなか信じないので、それで前もって、何度となく、はっきりと、そして事細かに、キュロス王の到来を伝えておられました。

主が行われているのに、それを、自分たちが仕えている偶像がそうしたのだということができてしまいます。イスラエルの名を誇っているのに、偶像にも仕えていることができるのか？と思われるかもしれませんが、捕え移されてからすでに 70 年近く立っていますから、伝統としてユダヤ教は信じているものの、周囲は偶像ですから、日々の生活にはそれに仕える習慣もあるわけです。その二つを同時に行っていた、ということになります。

かつて、バビロン捕囚後もわずかに残っていたユダヤ人が、さらにエジプトに逃げました。そこで、エレミヤが預言をしました。エジプトに逃げても、バビロンが追って来ることを預言しました。そのみことばを拒んで、彼らは、自分たちが拝んでいた天の女王を弁護したのです。「エレ 44:17-18 私たちは、私たちの口から出たことばをみな必ず行って、私たちも父祖たちも、私たちの王たちも首長たちも、ユダの町々やエルサレムの通りで行っていたように、天の女王に犠牲を供え、それに注ぎのぶどう酒を注ぎたい。私たちはそのとき、パンに満ち足りて幸せで、わざわいにあわなかった。だが、天の女王に犠牲を供え、それに注ぎのぶどう酒を注ぐのをやめたときから、私たちは万事に不足し、剣と飢饉に滅ぼされたのだ。」ここまで心が歪んでしまうと、どうしようもないですが、主が語られていたとおりに、偶像に仕えるようになったら剣や飢饉が起こったのに、偶像に仕えるのをやめたから、剣や飢饉が起こったと偽っています。

だから、そのようなことを一切言わせないために、ずっとずっと前に、キュロス王の到来をイザヤによって預言させるようにされたのです。

2B 知らない秘め事 ６－８

6 あなたは聞いた。さあ、これらすべてを見よ。あなたがたは告げ知らせないのか。わたしは今から、新しいことを、あなたの知らない秘め事をあなたに聞かせる。7 それは今、創造された。ずっと前か

らではない。今日まで、あなたはこれを聞いたこともない。『ああ、私は知っていた』と あなたが言わないようにするためだ。

今、イスラエルの民に、主は全く新しいことを伝えると言われます。それは、昔から用意しておられた、異教徒であるペルシアのキュロス王が、ユダヤ人にとってのメシア、救世主としての働きをするということです。ユダヤ人を救う方は、ユダヤ人から出るべきで、他の預言ではそのようになっています。けれども、主は秘策を考えておられたのです。彼らが、思いつきもしないこと、考えられないこと、「ああ、私は知っていた」と言わせないことによって、この方こそが神であると彼らが知るようにするためです。「それは今、創造された。ずっと前からではない。」と主は言われますが、もちろん、このご計画は昔から行われています。ここの意味するところは、すみやかに行われて、前から予測することはできないということです。

ここにある、秘め事、それが実行するまでは知られていないこと、これを新約聖書では、「奥義」と呼ばれます。「Ⅰコリ 2:7-9 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。」

彼らにとって、ローマの十字架が、自分たちの罪を清める、メシアの流される血などどうして想像できるでしょうか？異邦人が、自分たちのメシアをどうして死に定めて、それが救いになるということなのでしょうか？十字架につけらえたキリストが、彼らにとってつまずきになるというのは、そのとおりなのです。さらに、この方は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、すべての人に救いを与える方であることを信じるのは、思いをはるかに超えています。ユダヤ人でイエスを信じた者たちでさえ、異邦人にも救いを与えることには、御霊によって示される以外、到底、信じられませんでした。ちょうど異教徒キュロスが自分たちにとってメシアのようになることを信じられないように、信じられなかったのです。

しかし、これを主は、奥義と呼ばれます。エペソ 3 章にはこう書かれています。「3:5-6 この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」彼らの共同体意識は、ユダヤ人であるからこそ神の国に入るというものです。だから、異邦人は割礼を受けて、改宗して初めて救われます。それが、割礼を受けないままで、異邦人のままで、キリストにあって一つになっており、共に神の国を相続するというところは、神の秘

め事、奥義だったのです。

8 あなたは聞いたこともなく、知っていたこともない。ずっと前から、あなたの耳は開かれていなかった。わたしは、あなたが必ず裏切ることを、母の胎内にいるときから 背く者と呼ばれていたことを知っていたからだ。

耳が閉ざされているのは、彼らが背きの罪を犯しているからだということです。主は、イザヤを遣わされる時に、語っていましたね。「イザ 6:9-10 すると主は言われた。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らがその目で見ることも、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」」ヨハネの福音書には、ユダヤ人たちが初めは、「信じなかった」とヨハネは書いていますが、その後に、「信じることができなかった」と書いています（12:37,39）。心を頑なにしたゆえに、聞けるものが聞けなくなったのです。

そして、その頑なさ、心の鈍さは、母の胎内にいる時からであることを、主は教えています。ここで分かるのは、主に選ばれたユダヤ人とて、彼らも生まれながらの罪人であり、主によって生まれないかぎり神の国に入ることはできないということです。ダビデが、母の胎から罪ある者であることを、バテ・シェバとの姦淫について、告白しています。「詩 51:5 ご覧ください。私は咎ある者として生まれ罪ある者として母は私を身ごもりました。」律法を持っているユダヤ人であっても、こうであるのですから、持っていない私たち異邦人はなおさらのこと、初めから罪を犯していることは明らかです。（エペソ 2:1-3 参照）

3B 御名のための守り ９－１１

9 わたしの名のために怒りを遅らせ、わたしの栄誉のためにそれを抑えて、わたしはあなたを絶ち滅ぼさなかった。

イスラエルの民がいかに頑なであっても、それでも彼らを絶ち滅びしませんでした。それは、初めからイスラエルを選ばれたご自身が、その選びに反して見捨てることになれば、ご自身の名が、その栄誉が汚されることになるからです。主は、彼らの行いにも関わらず、ご自身の栄誉にかけて、イスラエルを滅ぼさないでいるのです。

これが、主の憐れみの力、選びの力です。多くの人は、どうしてイスラエルの民を、これだけ不従順なのに選ばれたのか？と言います。今のイスラエル人を見ても、そのように言う人々がいます。しかし、不完全な彼らを見ても、そこに神が働いておられることを、確かに見ることができるのです。これが、主がご自分の栄誉のために彼らを残しておられるということです。

10 見よ。わたしはあなたを錬ったが、銀のようにではない。わたしは苦しみの炉であなたを試した。

ユダヤ人は、バビロン捕囚によって、苦しみを味わいました。そして、そのことによって、彼らは練り清められます。残された者たちは、主を知ることになります。詩篇にも、「119:71 苦しみにあったことは私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました。」とあります。そして、ユダヤ人は終わりの日に、大患難を経ます。そのことによって、まことの神を知るようになります。「エレ 30:7 わざわいだ。実にその日は大いなる日、比べようもない日。それはヤコブには苦難の時。だが、彼はそこから救われる。」苦しみを経て、神の救いの知識に至るのです。

この神に、キリストにあって結ばれた私たちも、苦しみによって、神の愛を知るという約束があります。「ロマ 5:2-5 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

11 わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行う。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしの栄光を、ほかの者に与えはしない。

主の憐れみの働きは、ご自身だけに栄光が与えられるためであるということです。主は決してイスラエルを見捨てられず、そして異邦人も救いの中にいれ、その後にイスラエルを苦しみの後に救われるというご計画について、パウロがロマ 11 章の最後のところで、まとめてこう話しています。「ロマ 11:30-32 あなたがた（注：異邦人クリスチャンのこと）は、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けています。それと同じように、彼らも今は、あなたがたの受けたあわれみのゆえに不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今あわれみを受けるためです。神は、すべての人を不従順のうちに閉じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。」そして、パウロは、神の知恵の富に圧倒されています。ただ、神にのみ栄光を帰したのです。

主がイスラエルを選ばれたことによって、それ以外の人々が神々を拝み、忌まわしいことを行い、神から離れて望みがないことが明らかにされました。しかし、今度はイスラエルが律法があるのに、それでも神から離れ、異邦人がかえってキリストを信じることによって、彼らの不従順が明らかにされました。そして、最後に彼らも救われて、憐れみを受けます。神は全ての人が、ご自身の憐れみが必要であり、なぜならみなが不従順であるからということを知らせるために、ご自身の民としてイスラエルを選び、召されたのです。こういった知恵があるのです。

2A イスラエルを見捨てない方 12－22

1B 主に愛された者 12－16

12 わたしに聞け、ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしが初めであり、また、終わりである。13 まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を延べ広げた。わたしが呼びかけると、それらはこぞって立ち上がる。

再び主は、「聞け」と語りかけられます。なぜなら、彼らは、神ご自身が呼び出されたイスラエルだからです。イスラエルは、この方こそ神とすべきです。

そして神は、ご自身を「わたしが初めであり、また、終わりである。」と言われます。これはご自身が永遠の神であり、すべてを支配しておられる方という意味です。そして、この方がすべてを造られ、ご自分のみこころで、万物が成り立っていることを宣言されています。

イエスは、父なる神とご自身が一つであると宣言されました。ここのイザヤの預言を、黙示録では、イエスご自身の宣言で使われています。「黙 22:12-13 見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

14 みな集まって聞け。彼らのうち、だれがこれらのことを告げたのか。主に愛される者が、主の喜ばれることをバビロンに行う。主の御腕はカルデア人に向かう。15 わたしが、このわたしが語り、彼を呼んだのだ。わたしは彼を来させ、彼の行うことを成功させる。

主は、キュロスのことを、「主に愛される者」と呼んでおられます。これは、非常に興味深いです。キュロスがなぜ、主に愛されているのか？これは、彼がメシア的なことを行うからです。主に愛された者が、バビロンを倒し、御民を解放し、エルサレムに帰還させ、神殿の再建を命じるからです。同じように呼ばれるのは、メシアであるイエスご自身です。ご自身がバプテスマを受けられた時に、天からの声が「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」とありました（マタイ 4:17）。

16 わたしに近づいて、これを聞け。わたしは初めから、隠れたところでは語らなかった。それが起こったときから、わたしはそこにいた。」今、神である主は、私をその御霊とともに遣わされた。

ここ 16 節の話者「わたし」は、神ご自身でありながら、神に遣わされる方でもあるのではないか？と思います。キュロスに表れていたメシアのことではないか？と思われます。16 節の「彼」は、キュロスでもあり、後に来られるメシアご自身ではないか、主のしもべと 49 章以降で呼ばれる方ではないか？と思われます。

というのは、「それが起こったときから、わたしはそこにいた。」というのは、箴言で「知恵」と呼ばれ、また天地が造られた時からおられた方灯しても語られているからです。「箴 8:27-30 主が天を堅く立てられたとき、わたしはそこにいた。主が深淵の面に円を描かれたとき、28 上の方に大空を固め、深淵の源を堅く定められたとき、29 海にその境界を置き、その水が主の仰せを越えないようにし、地の基を定められたとき、30 わたしは神の傍らで、これを組み立てる者であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しんでいた。」この知恵は、神とともにいて、万物を組みたてています。そう、ヨハネ福音書の冒頭のことばです。「ヨハ 1:1-3 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。」主イエスは、神であられ、神とともにおられ、そして一つでした。

そして、「隠れたところでは語らなかった」というのは、キュロス王について預言するイザヤを通して、初めから語っていたということができますが、しかし、主イエスご自身がユダヤ人に捕えられ、裁判を受けておられる時にこう語られています。「ヨハネ 18:20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に対して公然と話しました。いつでも、ユダヤ人がみな集まる会堂や宮で教えました。何も隠れて話してはいません。」

そして何よりも、「今、神である主は、私をその御霊とともに遣わされた。」という言葉が、まさに主イエスご自身に当てはまることばです。イザヤが御霊に遣わされたとみなすこともできますが、バプテスマを受けられたイエスが、御霊に導かれて荒野に行き、誘惑を受けられました。そして、「御霊の力を帯びて、ガリラヤに帰られた。」とあります（ルカ 4:14）。

この 48 章は、次の 49 章の預言に入る準備をしているかのようです。これまで神は、キュロス王によるユダヤ人解放と救いのご計画を示していました。しかし今、キュロス自身がメシアを示しており、主のしもべとして用いられていたが、メシアご自身が、主のしもべとして働かれる預言が、49 章から始まります。

2B 耳を傾けたことによる平安 17－19

17 イスラエルの聖なる方、あなたを贖う主はこう言われる。「わたしはあなたの神、主である。わたしはあなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。18 あなたがわたしの命令に耳を傾けてさえいれば、あなたの平安は川のように、正義は海の波のようになったであろうに。19 あなたの子孫は砂のように、あなたの身から出る者は 真砂のようになったであろうに。その名はわたしの前から断たれることも、滅ぼされることもなかったであろうに。」

主がこれだけ良いものを備えておられるのだから、ただこの方に聞きさえすれば平安が川のように、正義が海の波のようになると約束されます。その子孫が、アブラハムとの契約のように、砂の

ように増えるはずなのに。ただ、聞きさえすれば、なのです。パウロは、信仰によって福音を聞くことを、イスラエルがしなかったことについて、ロマ 10 章で語っています。

多くの人が、すでに与えられている平安と正義が、心を開き、聞きさえすれば一気に広がっていくのに、信じないことによって滅んでいってしまうのです。

3B　バビロンから出る喜び　20－22

20 バビロンから出よ。カルデアから逃れよ。喜びの声をあげて、これを告げ、聞かせよ。地の果てにまで響き渡らせよ。「主が、そのしもべヤコブを贖われた」と言え。21 主が荒れ果てた地を通らされたときも、彼らは渇くことがなかった。主は彼らのために岩から水を流れ出させ、岩を裂いて水をほとばしり出させられた。

キュロス王によって解放されたユダヤ人が、これまでのメッセージに応答して、バビロンから出るように励ましています。そして、約束の地においては、水が流れ出て、決して渇くこともないことも約束しておられました。これはあたかも、エジプトから出て、荒野でも水がほとばしり出た時のようです。第二出エジプトを、彼らは約束されていました。

22「悪しき者には平安がない。」 主はそう言われる。

どんなに平安が用意されていても、それを拒めば平安がないという警告で、一区切り目が終わります。私たちは、どちらを選ぶでしょうか？聞いて、心を開いて受け入れて、平安と正義を手にするか？それとも、聞かないで平安がないままでとどまるのか？であります。